MEDICAL OFFICE

医療の最前線からのワンポイントアドバイス

泌尿器癌におけるロボット支援手術

医学部　専任講師（泌尿器科学教室）　武田利和（たけだ としかず）

ロボット支援手術は、腹部に数カ所小さな穴を開けて、ロボットに取り付けた内視鏡と鉗子（かんし）（電気メスやハサミなどが付いた手術器具）を体内に挿入して行う手術です。術者が患者さんから少し離れたコンソールという場所で、３Ｄ画面を見ながらロボットを操作します。泌尿器癌では前立腺癌に対する全摘術が２０１２年、腎臓癌に対する部分切除術が２０１６年、膀胱癌に対する全摘術が２０１８年に保険適用となりました。これらの手術は腹部を大きく開く開腹手術、長い内視鏡や鉗子を挿入して行う腹腔鏡下手術を経て、現在ではロボット支援手術で広く行われるようになっています。

ロボット支援手術のどこが良いのでしょうか？　まずは、患者さんの負担軽減が挙げられます。①小さな傷で済むため、術後の痛みが少なく回復が早い、②二酸化炭素を注入して腹部を広げて手術をするため、二酸化炭素の圧力により出血が抑えられる、といったメリットがあります。次に精度の高い手術が挙げられます。①術者は体の奥底でも拡大された３Ｄ画面で見ることができ、詳細な情報を得ることができる、②ロボット鉗子の先端の関節は人間の手首の関節よりも多く、人間の手では困難な動きが可能、③手ぶれが補正された繊細な手術操作が可能、といったメリットがあります。患者さんにも術者にもメリットの多い手術であると言えます。

しかし、進行して病気が他の臓器にまで転移してしまっていると、手術をすることができません。つまり、早期発見が重要です。前立腺癌はＰＳＡ（Prostate Specific Antigen）という腫瘍マーカーが発見のきっかけになります。腎臓癌は健康診断の超音波検査が発見のきっかけになります。どちらも症状のないまま発見されることがほとんどですので、きちんと検査を受けることがとても大切です。一方、膀胱癌は血尿で発見されることが多い癌です。しかし、真っ赤な尿が出ても痛みがなく、次の日には止まってしまうことが多いため、治ったと勘違いして病院を受診するのが遅れ、手遅れとなってしまうこともあります。膀胱癌の手術治療は早期では尿道から内視鏡を挿入して切除する手術で済んでしまうことがほとんどです。血尿が出た際はすぐに泌尿器科を受診することが重要です。

このように、さまざまな泌尿器癌の手術でロボットが活躍する時代となりましたが、早期発見や早期受診が重要となります。定期的な健康診断を受けていただき、有症状の際は早めの医療機関の受診をお勧めいたします。